

ラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸のホール

“ニワトリのヒナが初めて目にしたものを親と思い込む”、という習性に近いものがあるかもしれないが、「ラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸」(1925)に足を踏み入れた途端に目の前に広がる3層吹抜きの空間が、網膜に焼き付いたかのように、頭から離れない。

数あるル・コルビュジェの作品の中で、パリの16区にあるこの住宅を最初に訪れたという人は多いのではないだろうか(西洋美術館[*]は除く)。私も十数年前、初めての対面に胸を躍らせながらメトロの駅から歩き、まるで前年に建てられたかのように、輝くばかりに白い量塊の前に佇んでいた。現代美術(当時の)の収集家でもある独身の銀行家ラ・ロッシュと、ル・コルビュジェの兄で音楽家のジャンヌレ一家の住宅の、いわゆる二戸一の構成で、水平連続窓やポツ窓で構成されたファサードや、屋上庭園、スロープ、ピロティなど、彼が提言した新しい建築言語が最初期の作品にして見事に結実した、誰もが知っている名作である。

ホールには、納まりとしてのデテールや素材で特筆するものはない。この空間の魅力を書き記述するのは難しい。ホールに面しているのは、吹抜けによって分けられた居住空間とギャラリーを結ぶブリッジと、それぞれの縦動線と廊下である。それらを構成する腰壁の高さと手すりの関係(腰壁の裏に手すり、腰壁の上に手すり、腰壁と天井の間が手すりと同じ部材で格子状に埋められている)や、バルコニー状の張り出しなどの組み合わせによって、濃密で透明で奥行きのある空間が出来上がっている。C.ロウのいう「フェノメナルな透明性」とはこのようなものだろうか。豊かな内部空間でありながら、2つの建物のファサードに挟まれて共鳴し合う外部空間のようでもあるこのヴォイドこそが

「ラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸」の本体で、ル・コルビュジェが生み出す空間の神髄であり、スロープのあるギャラリーや他の部屋、“新しい建築言語”などは、脇役かアリバイにすぎないのではないかと思う。

原稿のために古いスライドを引っ張り出してみたが、この空間の魅力はカケラも写っていなかった。*

さとう・みつひこ——建築家・日本大学理工学部 助教授/1962年生まれ。1986年、日本大学理工学部建築学科卒業。1986～93年、伊東豊雄建築設計事務所。1993年、佐藤光彦建築設計事務所設立。
主な作品：梅ヶ丘の住宅(1998)、仙川の住宅(2000)、+A VIA BUS(2001)、江東の住宅(2003)など。



【*】国立西洋美術館(1959)ル・コルビュジェ

上——ラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸
ホール北側
下——同ホール南側